

Envision. Research. Create.



好きな研究をしてよいと言われたとき、 あなたは意義のある研究ができるでしょうか? 研究には、常識にとらわれず高い理想を掲げる構想力と、 現実を見すえる厳しい眼の両方を持つことが必要です。 そして遠い将来に向けて理想と現実の橋渡しをすることが研究者の任務ですが、 決して容易に成し遂げられることではありません。 しかし、それを達成する能力があり、意欲に満ち、 しかも自由の重みを知っている研究者は、いまや最高の研究環境を得る権利が あると考えます。この研究所は研究者にとって最も望ましい環境を提供するとともに、 個人の自由意思を尊重し、新たな研究分野を開拓し、単なる模倣や改良に終らない 真に創造性にあふれた研究活動を行うために設立されました。 そして、それを通じて真の意味で国際社会に貢献することを目標としています。

ソニーコンピュータサイエンス研究所 社長 シイ 英 ポス ポープ・ドー・株式会社上展常務

Research, in the true sense of the word, is to set a high ideal based on a full understanding and critical view of the existing state of technology, while striving for a new approach to bring it to reality. The Sony Computer Science Laboratories is the place for those aspiring researchers who know what research really means. We search for the technology that will prove its worth even in the years ahead. Our work is unrestrained by commercial needs. With the policy of bringing out the best in individuals, we respect and foster each member's initiative and creative ability. We contribute to the world by creating new possibilities for tomorrow.

Envision. Research. Create.











歴史と成果

ソニーコンビュータサイエンス研究所は1988年2月に創立され、 同年4月に東京で稼働を開始しました。 その後、オブジェクト指向分散オペレーティングシステム Aperios、計算場モデル、 移動ホストプロトコル VIP、プログラミング言語、仮想三次元標準記述言語 VRMILや ブラウザーCommunity Placeへとつながるパーチャル・ソサエティーの概念、 エージェント指向インターフェース、マルチエージェントシステム、 実世界指向インターフェース NaviCam、拡張現実感、認知ロボット、 次世代インターネットアーキテクチャ Media Cruising 等に関する

研究と開発を行い、各方面から高い評価を得てきました。そのうちの多くの技術は木补へ 移管、各種製品に活かされ、また国際標準化にも貢献して来ました。

研究活動の国際化を推進するために、1996年の10月にはフランスのパリに研究所を新設1 認知機構や進化的システムの研究を中心に進めています。

また、1998年には先端情報通信研究室、音声言語情報処理研究室、 1999年にはインタラクションラボラトリー、そして2000年にはネットワークラボラトリーを加え 研究開発の幅を広げるとともに質の向上に努めております。

History and Achievements



ソニーコンピュータサイエンス研究所は開設以来、その一貫したテーマとして 「開放型システム」を掲げています。開放型システム(open systems)とは 閉鎖型システム(closed systems)に対するものです。 これまでの科学技術は問題の領域を定義し、切り取り、抽象化することによって 問題を解いてきました。しかしながら、近年我々は定義しきれない問題、切り取ることができない 問題を解かねばならない状況に至っています。その一般的な例としては社会、経済現象や 生命の問題を挙げることができます。コンピュータシステムに関して言えば、 それぞれの全く別の方向にある典型的な二つの方向を挙げることができます。 第一の方向は広域、分散、移動コンピューティング環境です。 時々刻々ネットワークトポロジーが変わり、接続されるコンピュータやそのサービスが変わる 環境の下で、我々はダイナミックで有機的なマルチメディア情報ベースを利用しながら 仕事を行ってゆくことになります。そのようなシステムは、個々の要素システムについての 十分な知識をもっていたとしても全体の振舞が予測できないと言う意味で開放型です。 常に変化する環境に対して安定した性能を上げることのできるようなシステムの 設計開発のための方法論や技術を確立する必要があります。 第二の方向は利用者に対する利用環境に関するものです。真に使いやすい利用者環境を 提供するためには、利用者すなわち人間について良く知らなければなりません。 ところが人間自体の定義はなく、極めて多元的で、その行動は状況や時間に強く依存します。 人間を還元論にのみ立脚して理解し、定義づけようとすることには無理があります。 ここでも人間自体を開放型システムであると捉える必要があります。

Perspective
The main research theme of Sony CSL has been open systems—as opposed to closed systems, in which we believed that we could solve problems by cutting out sections and abstracting them for manipolation. Recently, "the scientific community" has feed word key problems which cannot be solved as closed systems. Social, economic, and temple phenomenac coordin many examples of such. In relation to computing, we are pursuing two the phenomenac coordin many examples of such. In relation to computing, we are pursuing two the phenomenac coordin many. One area is related to widely distributed, mobile computing environments with network propologies, connected computers and services are changing continuously. Such environments are open in the sense that the behaviour of the whole integrated system is more than the sum of the behaviours of its components. We need to develop methodologies and techniques for the development of systems which give high yet stable performance in such dynamic environments. The other area of research is related to users.

To provide truly easy-to-use environments to users, we have to learn more about humans. However, humans are not well-defined and their behaviour is strongly dependent on situations. It is impossible to understand humans with only a reductionistic analysis.









基盤研究室 Fundamental Research Laboratory 所 真理雄 TOKORO, Mario

基盤研究室(FRL)では、コンピューターサイエンス及びコンピューターサイエンスが変革の鍵と なる研究領域を対象とした基礎研究を行っている。これには、計算脳科学、システム・バイオロジー、 計算軽済学などの分野をはじめとして、次世代計算機アーキテクチュアやソフトウエアに関わる 研究も包含される。

FRLが対象とする基礎研究では、研究者の個性と志が、高水準な研究の原動力であり、各々の テーマや研究者の個性の多様性を受け止める研究環境を備えている。また、FRLの研究から 応用段階に近づいたものはソニー本社へ技術移管され、あるいはCSL内の新たなラボへと発展 する。すでに、実時間OSのAperios、VRMLの引き金となったVirtual Societyプロジェクトなどが、 ソニー本社で展開し、インターフェース関係は、VAIO-PCへの組み込みを行うと共にインタラクシ ョンラボへと発展している。また、システム・バイオロジーやカオスに基づくロボット認知の研究など、 学問的に重要な貢献も積極的に行っている。

FRLは、将来のコンピューターサイエンス及びソニーの事業の基礎概念を生成する「ゆりかご」 または、「多様性の森の中の繭 (コクーン)」のような研究室である。

A broad range of research on computer science and science that can be empowered by computing is being carried out in the Fundamental Research Laboratory (FRL). Topics include computational brain science, systems biology, computational economics, next-generation computer architectures, and novel software designs. The talent and awareness of individual researchers play a critical role in the success of this basic research. The policy of FRL is to provide a research environment that can embrace diverse research theme and individual characteristics. When research projects approach the application stage, their results are transfer to Sony Corporation, or used to start a new laboratory within Sony CSL. A real-time operating system Aperios and the virtual society project that traggered the Virtual Reality Modeling Language (VRML) were initiated in Sony CSL and transferred to Sony Corporation Some of the results in human computer interaction research led to build be a superior of the fine project of the search of the search of the fine traction Laboratory within Sony CSL. Apart from such research that has a direct impact on products, FRL also engages in basic science, such as systems hology and robotic control using choos and neural networks, that contributes to pure science.

FRL is a laboratory that has positioned itself upstream of the invasition that creates the fundamental concepts of computer science and Sony's future business. A broad range of research on computer science and science that can be empowered by

オープンマーケットやインターネットのように沢山の人間が構成する複雑なシステムにはフラクタル性を有するゆらぎが 普遍的に発生することが知られている。これらのシステムの背後に潜む動的な相転移のメカニズムを想定する事によって、 現象を定量的に記述できるような数値モデルを構成する事ができる。このような視点から、円ドルレートの秒単位での変動の特置抽出 企業所得の分布や変動の法則性、インターネット情報流の渋滞の制御などの具体的な問題を、データの分析とシミュレーションと 理論解析の3方向から実証科学の立場でアプローチしている。

Fluctuations having fractal properties are commonly observed in a variety of complex systems such as foreign exchange markets Fluctuations having tractal properties are commonly onserved in a variety of complex systems such as foreign exchange markets and information traffics over the Internet. By introducing the statistical physics notion of dynamic phase transition we can construct computational models that capture the basic dynamical and statistical properties of such phenomena. High-precision measurements of real complex systems provide the bases for a statistical analysis of predictability and controllability of complex.



田中久陽 TANAKA HISSI-AK

現在の技術は一層高いクロック周波数を可能とし 1chipのプロセッサーVLSI上で既にGHzのクロック周波数が実現されています。 このような高周波数技術の進展は限界を迎え、何かにとって代わられるのか? 或は更に進んで行くのでしょうか? 私の興味は、技術において物理限界と 人間のライフスタイルの界面にあり、具体的には同期式、非同期式システムの 境界に注目し、そこで理論のみならず、現実的なシステムを

試作することを目指しています。

Current technology makes righter consisting propurations possible and a CITI-corder frequency has been attained on one-chip processors. Will the trend to ever higher frequency clocking become extinct like the dimosums, or continue on keep progressing? The essence of this question is the interface between our human life style and the limits of physical laws. I'm currently working on interfacial problems between synchronous and



北野 宏明 KITANO, Hiroaki

生命は、非常に複雑なシステムです。 ゲノム解析などの研究の進展と共に、個々の遺伝子やタンパク質の 構造や機能が、急速に解明されつつあります。 「システムとしての生命の理解」へと統合されなければなりません。 私は、システム・レベルでの生命の理解を目指した、 現在、酵母、線虫、ヒト細胞などをターゲットに、理論解析、 測定機器の開発、ソフトウエア基盤の形成に全力を尽くしています。





增井 俊之 MASUL Toshronki

計算機やネットワークの普及により社会が大きく変わりつつありますが、

計算機を使いこなすこともネットワークから情報を探すこともまだまだ簡単ではありません。

運もが簡単に情報を作成 検索 再利用 交換できるようにするための

直感的で効果的な操作手法や装置の研究を行なっています。

新しいユーザインターフェース技術の統合により、計算機は人間の能力を真に拡張する有効な装置となるでしょう。

谷 淳 TANI. Jun

私は認知における不完全性とそれを補う意味での自律性の問題に興味を持っています。 開放系に置かれた認知的主体が行動を通して得られる世界の記述は、 常に矛盾に満ちています。その主体が、決して理解しうることのできない世界と折り合いを つけていく、また矛盾を抱えながらも新たな行動を試み続ける利那には、 どのような認知の自律的メカニズムがはたらいているのでしょうか。 このような問題を、力学系の枠組において理論的に捉え、また自律ロボットでの実験を通して 構成論的に考察していくことが、当面の私の研究の課題となります。

My research objective is to understand the fundamental cognitive mechanisms which enable animals or humans to learn and recognize their dynamic environments. I'm particularly interested in questions like: How do they manage to adapt to open environments even though their cognitive abilities are finitely bounded? How do they continue to generate new

nough their cognitive abitines are finitely bounded? How do they continue to generate nebehavior seem though their outcomes are not guaranteed? I am attacking these problems taking the constructivist approach, by building cognitive robots. Through these robotics experiments, I am attempting to articulate the organizing principles of the embodied cognition using dynamical systems language.

J. Tani and N. Fukumura.

Self-Organizing Internal Representation in Learning of Navigation: A Physical Experiment by the Mobile Robot YAMABICO. No.



茂木 健一郎 MOGI. Kenichiro

脇科学は、現在、「システム論的転回」というべき変革の時期を迎えています。 感覚、記憶、運動制御など個々の脳機能を個別に研究する時代は終わりを告げ、 脳全体をシステム論的に理解することが最先端の研究のチャレンジになっています。 例えば、「見る」という一見単純な行為の神経機構も、 脳全体のシステム的な関与を考慮しなければ解明することができません。 私は、クオリアと視覚的志向性の相互作用に基づく能動的な視覚認識の理解や、 感覚と運動の融合を通したボディ・イメージの研究などを通して、 騒全体のシステム論的理解を進め、さらに騒に宿る「心」の起源の理解をも目指します。

Brain science is now going through a period of a "systematic turn" Brain science is now going through a period or a systemana sum: At the frontiers of brain science, it has become necessary to study the entire brain as a single system, from the occipital cortex through the parietal and temporal cortices to the frontal cortex, while also taking the subscritical systems into account. I am particularly interested in understanding how the simple act of "seeing" (in cases such as bincular rivaly) is sustained by the neural mechanisms that are correlated with visual qualita and intentionalities. I am also interested in the cortical mechanisms that sustain our body image.

茂木健一郎。「心が筋を感じる時」、講談社、1999年



フランク・ニールセン NIELSEN, Frank

私は計算幾何学の適応アルゴリズムと出力依存アルゴリズムの拡張に関して 研究をしています。アルゴリズムは、その実行時間などが入出力のサイズだけでなく 複雑さの解析に関係する固有のパラメータに依存する場合に適応的と呼ばれます。 これは幾何学的最適問題において特に無味深いニンであり 近似解と実行時間が入力固有なある計算可能性に対し適応的なアルゴリズムを

えることは重要です。例えば、問題がやさしければやさしいほど、近似解はより早く、 またより良い解がみつかることなどです。私は現在、適応アルゴリズムの観点から、 計算機何学の技術とコンピュータビジョンや

計算生物学を結びつけることに関心をもっています。





佐々木 貴宏 SUSUKI TORONOM

生物や人間社会等の実世界における多くのシステムの設計・動作原理はトップダウン的に規定される。 人工物のものとは全く異なっており、実世界という動的かつ予測不能で複雑な挙動を示す環境の 様々な局面に係めて重軟に対処しています。私は、特に個レベルでの学習能力と集団として 世代をまたく選化といった生物の持つ適応能力に着目し、その階層的な適応メカニズムを元に柔軟で かつ頑健な新しい情報処理モデルの模索に取り組んでいます。 この情報処理のモデルは、無数のコンピュータがネットワークを介して繋がる開放型分数環境において 重要な役割を果たすことになると考えています。





井上 敬介 INOUE, Keisuke

プロセッサに求められる処理能力はととするところを知りません。 ならに、ネッサワーク情報端末では高性能だけてなく販貨管電力もプロセッサに 求められます。半導体技術の向上により1チップ上に搭載可能なトランジスタ数は 増加の一途を辿っていますが、プロセッサのアーキテクチャ前では 命令レベルの影列処理技術による高速化が頭打ちとなっています。 私はオンチップマルチプロセッサや効率よくマルチタスク、マルチスレッドを 健康できるアーキテクチャで、とかの、実効性能を目指しています。

The demand for higher processor performance continues to increase. In addition, power consumption must be reduced in network appliances. In this era of VLSI technology, many processors which exploit instruction level parallelism (ILP) by using superscalar or VLIW technology have been developed. Unfortunately performance improvements will become more difficult because ILP is limited and the complicated functions to be added will not exploit more ILP. To overcome this limitation, I am studying on-chip multiprocessors and structure that provide sufficient multi-tasking or adequate multi-thread processing.

PhD thesis, Dept. of Computer Science, Keio Univ.

井上歌介、芸林正樹、木村克行、天野英晴。 「オンチップマルチプロセッサ用草具有型壁包連想キャッシュ」、 情報処理学会論文誌、Vol.40、No.5、pp.2008-2015、May 1999.

井上歌介、天野英晴。 「オンチップマルチプロセッサ用半共有型股似連想キャッシュの改良」、 電子情報通信学会論文誌、Vol.J83-D-I, No.7, pp.731-739, Jul. 2000





大平 徹 Ohira, Toru

私はノイズと相互作用に遅れを含むような系の問題を数理的に解析する 研究に従事しております。分散ネートワークシステム等においては、 ノイズや情報伝達の遅れは一般には障害として考えられています。 しかし自然県、特に集体の情報処理においては、このようなノイズや遅れを 変服しているほかりでなく逆に積極的に利用している何も見られます。 私の研究の主服は、そのような自然界の具体側に学示側面と、最近提明いたしました 「Delayed Random Walk」を中心とした数甲モデルの構築および解析を進める 側面のそれぞれの展開と機合にあり、将来における分散協調情報処理システムの 構築への一助となることを目標としております。

I am engaged in a research project to investigate the behavior of mutually interacting many body systems in the presence of noise and delay. Noise and delay are normally considered to be obstacles for information processing. However, in nature, and particularly in hiological systems, there are examples which have taken advantage of noise and delay for effective information processing. The main focus of my research is a development and a synthesis of two aspects of this problem, the study of conserved examples in nature which possess properties that exploit noise and delay, and the analysis and development of mathematical models to describe such systems. I hope my research will produce a contribution for the future development and realization of effective open distributed information processing systems.

Toru Ohira and Yuzuru Sato, "Resonance with Noise and Delay", Physical Review Letters, vol. 82, pp. 2811-2815 (1996)
Toru Ohira and Toshiyuki Yamane, "Delayed Stochastic Systems", Physical Review E, vol. 61, pp. 1247-1257 (2000).

大平徽、佐藤譲、「ノイズと遅れの共鳴現象」、日本物理学会誌、単55巻第5号、2000



岡村 英明 OKAMURA, Hideaki

デジタルTVや携帯電話のような情報家電が接続された 新しいタイプの分散システムでは、計算機器関で計算能力の相違、 ユーザの解析、計算機器回移動といった環境変化が多発するため、 既存の分散システムと比較して、その計算支援の有効利用が明確です。 このため、分散システムは環境適応の能力を持つことが必要不可欠です。 現在、環境通応能力を持つシステムを構造するために、 メタレベルアーキテラナキに基づて環境変化に対応しやすいシステム構築方法、 システムソフトウェアの部分的な演換機構、実行プログラムのシステム内の 最適保用方法、計算機器の看数、移動に応じたシステム系の 対応機構についての研究を行い、各家庭を情報を換基地に進化させるような 計算システムの応用方法を根索しています。

Recently, distributed systems consist of information appliances such as digital televisions and cellular phones. On those systems, it is difficult to use computational resources efficiently since they have a lot of environment changes because or a variety of computational resources, user preferences and device mobilities. Thus, systems need to support 'environment adaptation' mechanisms by which the system can be adapted to those changes. I am currently studying meta-level architecture, partial system software replacement, optimal program location mechanisms and adaptation mechanisms for connection and disconnection of devices. I am also applying the idea of an environment adaptation mechanisms to the study of application programs that enable every home to be an information reckange gateway.

Hidraki Okamura, Yutaka Ishikawa and Mario Tokero, Metalevel Decomposition in AL-1/D, in Proceedings of the International Symposium on Object Technologies for Advanced Software (ISOT)

Hidraki Okumura and Yutaka Ishikawa.

Object Location Control Using Metalevel Programming, in Proceedings of European Conference on Object-Oriented Programming (ECOOP94)

Hidraki Okamura and Yasubiko Yokote.

Customizing Application Object Execution by System Object Downloading in Embedded Operating Systems in Proceedings of IPSJ 81th Workshop of System Software and Operating Systems. Also present as Technical Report of Sony Computer Science Laboratories. Associated Systems.

河野 通宗 KOHNO, Michimum

私の主な研究対象はオペレーティングシステムとネットワーク、特にリアルティ人OSに関してです。ソニー本社において現在機かっているフロジェクトは、実現代モーバイル向けの、マルチメディアソフトウェアブラットフォームの創造です。現存する機関のリアルティスのは音楽力のためのメルニスな合機動的に提供するにはまだまだがっておらず、プレイクスルーの特たれている領域です。このプロジェクトにおいて、メモリ特殊・電力制御、各種セドルウェアを担当しています。一方で実具界指向のヒューマンインチフェースの研究にも概味を持っており、特米的には及ぶまたから研究に関わりたいと思っています。

I am interested in operating systems and networks. Our current project at Sony Coperation is to create a next spectation, mobile, multimedia software platforms. Since almost no commercial real time operating systems have been conscious mough of power consumption, we are trying to make a broadtherough in this area. I am also interested in human interface systems, especially wearable computers, and sensor-articular networks reading power consumption in also important for these systems. Software the computers of the computers of the computer of the computers of the computers of the computer of the computers of the computer of the computers of the computers of the computers of the computer of the computer



対策議会、技术活点、発発性と支持を一致、「進化をセンサルバントの確定する」、至于情報通信で急遽では、Vid IDA No. 1 (pt. 43+42 (1994) 対策議会、大田大夫、白石集、安持を一致、「開放分貨場合のためウセンサル・7度用しよりよ」、情報を指す急遽では、Vid 44, No. 3 (pt. 1294 (1994)

Kohns, M., Marsemaga, M., Annai, Y., "An Adaptive Sensor Network Systems for Complex Environments," Robotics and Autonomous Systems, Vol.28, pp.115-125, 1989

先端情報通信研究室(Advanced Telecommunication Laboratory ATL)は、人とコンピュータをネ ットワークで結ぶ情報通信に関する先端的研究を、世界最高レベルの人材と環境で行うことを目的に、 1998年7月にソニーコンピュータサイエンス研究所の中に設立されました。

情報通信分野における、今後の研究開発を国際的にリードする先端研究者、技術者の頭脳集団として、 鋭敏なセンスと卓越した創造力と情報解析力に基づき、情報通信分野の究極ビジョンを達成するため の基礎理論と基盤技術を創造、構築すると共に、その実用化に価値をおくことを基本方針としています。 特徴は、従来からのコモンキャリアとその傘下のマニュファクチャラによる公衆網からの情報通信ビジネ スへのtopdown型アプローチに拘らず、家電、PC、インターネットなどからのbottomup型アプローチを 志向しています。また、基礎研究に拘らず、将来広範に発展する可能性の高い実用研究を積極的に 宝飾! ます。

ATLは将来にわたって明快な長期展望をもち、絶えず国際社会の変動を正確に認識し、情報通信分 野の先端研究をリードしていくCenter of Excellenceであります。

The Advanced Telecommunication Laboratory (ATL) was founded in July 1998 in Sony The ATL is a center of excellence for world-wide top revens of researchers and originees reading research and development in a field of telecommunications with extraordinary creativity based on sensitive penetration and outstanding capability of analysis. The basic principle of the ATL is to create and establish fundamental theories and key technologies achieving ultimate vision in a field of telecommunications as well as to apply them for practical systems and products. We focus on a bottom-up type of approach to research subjects in telecommunications from a viewpoint of consumer electronics, personal computer, internet etc. rather than a conventional topdown type of approach which a common carrier and manufacturers under its umbrella have pursued. Not only basic research but also practical research in subjects which will be utilized

for variety of applications in near future is aimed.



野

降

5年、10年、20年先に役立つシステムを予想し、その実現に必要な理論、技術を研究し、大学、学会、産業界、官庁を先導するという姿勢で 研究活動を行ってきました。特に、第3世代移動通信システム(広帯域CDMA)、無線LANなどで知られるスペクトル拡散通信方式、 空間分割多元接続 (SDMA) 、Space-Time Code、高度交通システム (ITS) などに用いるアダプティブアレーアンテナ、ソフトウェアにより ハードウェアのコンフィグレーションを変更して多目的に使えるソフトウェア無線システムを実現する技術と、それを支える理論の研究を行っています。 これまでの経験を踏まえ、情報通信分野のこれからを担う研究開発を、最高のメンバーと環境で遂行しております。

I have been conducting research into theories and technologies that will be of most use to academia, industry, and government, in particular, spread spectrum communication for the third-generation mobile communication system (wide-had for multiple-purpose communications based on recolling and interest that the state of the state Laboratory(ATL).

Ryuji Kohno, Spatial and Temporal Communication Theory Using Adaptive Antenna Array, TEEE Personal Communications, pp.28-35, Feb. 1998

Ryun Kohno, "Structures and Theories of Software Antennas for Software Defined Radio," IEICE Transactions on Communication, vol.E83-B, no.6, pp.1189-1199, June 2000

春山 真一郎 HARUYAMA, Shinichiro

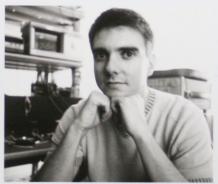


コンピュータシステムはハードウェアのアーキテクチャとその上で走るソフトウェアから 成り立っています。しかしながら、一度ハードウェアとソフトウェアが定義されると、 その動作中にシステムが変更されることは普通ありません。 もし、コンピュータシステムをダイナミックに変更する事が可能なら、スピード、利用リソース。 消費電力などの点で最適なパフォーマンスが得られるでしょう。最近のDSPチップや FPGAチップ (Field-Programmable Gate Array) の進歩のお陰で、コンピュータシステムを 部分的にあるいは全体的に変更(リコンフィギュア)することが可能となりました。 ワイヤレス無線システムがあり、「ソフトウェア無線」と呼ばれています。 私はソフトウェア無線を現実のものとするために研究開発を行っています。

FPGA in the Software Radio", Mark Cummings, Shinichiro Harsyama, IEEE Communications Magazine, Vol. 37, No. 1, February 1990

ダイナミックに変化を遂げることのできる無線システムとして、 従来のような固定したハード中心の無線システムではなく、 DSPやFPGAなどの書き換え可能なハードとそれを動かすソフトウェアを 融合した無線システム、ソフトウェア無線が実現されようとしています。 ソフトウェア無線は、周りの状況を判断して自身を柔軟に変化させ、 最適なコミュニケーションをユーザに提供します。 例えば移動体通信においては、無線通信路の特性は時間的・空間的は 激しく変動します。私は無線システムがあらゆる通信路の変動に 適応するように、ソフトウェア無線システムの 時空間信号処理に関する研究を行っています。

H 俊

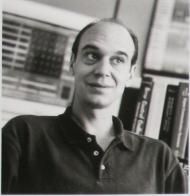


ロックラン・マイケル MICHAEL Luchian

in particular once one vyge or communication networks with or characterizated as an ad-hoc nature, that is not relying on centralized infrastructure, will be low power and a have high degree of reconfigurability. I am researching how to design such new communication networks. One example is the Intelligent Transportation Systems (ITS) wireless communication

The future of wireless communications will be more than simply the mobile

L.B. Michael and M.Nakagowa "Spread Spectrum Inter-Vehicle Communication Using Societ Assessment" pp. 2627–2633 IEEE Trans. Fundamentals, Vol.EEC-A, No. 12, December 1988. L.B. Michael and M. Nakagewa, "Non-Platton Inter-solicite Communication Using Multiple Hops" pp. 1851–1858, IEEE Trans. Commun. Vol. EEC B. No. 10 October 1998. マイナル ロックラン、中川 正第「事・関連信における対内集からの子亦符性」電子機能連位学会施工器。pp. 2034-2042.Vol.H2-& No.11.1988年11月



ロバート・モレロス-ザラゴザ MORELOS-ZARAGOZA, Robert

My main interest at ATL is in the design and implementation of advanced signal processing algorithms, for digital wireless communications, that can take advantage of the reconfigurable nature of the platforms over

To this end, my current research activities focus on the following topics:

モハマド・ガバミ GHAVAMI, Mohammad

Increase of the demand for different broadband services is a key problem of the future mobile communication systems. Because of the limitations of the available spectrum for providing high data rate communications for new cellular subscribers, the application of smart antennas can increase the system capacity and performance. These antennas, not only increase the gain, but also reduce the interference and the delay spread by means of spatial filtering. I have been doing research regarding different structures and applications of wideband smart antennas during the last two years and I am trying to utilize these experiences for implementation of a flexible wireless software radio system.

M. Ghavami and R. Kohno,
"Recursive Fan Filters for Broadband Partially Adaptive Antenna"
IEEE Trans. Communications, vol. 85, no. 2, pp.185–188, Feb. 2000.

M. Ghavami and R. Kohno,
"Bearing Estimation with Uniform Resolution in Broadband Environment"
Proceedings of IZS 2000, Zurich, 2000.



音声言語情報処理研究室 Speech and Language Information Processing Laboratory

音声言語情報処理研究室:SLLは音声と言語を中心に据えた新しいコンピュータの利用法を探 ることを目的に、1998年10月に新設されました。既成の概念や手法に囚われないコミュニケーショ ンモデルと、様々な媒体を取り込んだ、人間と計算機とのコミュニケーション手法とを追究・創造し ます。とくに、情報を自発的に咀嚼し、自立的に的確に音声言語を発声する、アクティブ・コミュニ ケーションの創造を目指します。

そのために、音声を含めた外界の多様な情報を統合的に捉え、人間と同じように、経験に基づい て新たな知識を獲得する計算機構を創造します。それにより、音声対話の理解と生成の機構を 具体化し、計算機の言語獲得・視覚化・概念化を迫究します。

音声を介したコミュニケーションは日を見張るほどのいろいろな現象によって実現されています。 たとえば、情報の関連付け、実時間の対応と応答、話者相互の指示の共有、排他的な文法適用、声音、韻律などを挙げることができます。 そのような音声コミュニケーションの研究において、人間のコミュニケーション実行の過程と、高度な具体的処理機構とに興味があります。 とくに、インタラクションの機構、言語運用の仕組み、それに音声言語使用の任意性とが重要と考えています。

それらの問題を解決していくために、一語発話による対話を提明し、指示共有化、従来の発話行為論を脱却する新しい言語運用、 状況適応性が高い頑健な音声認識、指示参照の領域制御、多様な音声生成などについて問題の本質に挑戦します。





岩橋 直人 IWAHASHI, Naovo

人間との自然なコミュニケーションを通して、言語・世界知識を学習できる コンピュータシステムの研究を行なっています。

このようなシステムは、音声を含めた外界のさまざまな情報を統合的に処理し、人間と同じように 経験に基づいて新しい知識を獲得できなければなりません。

変化する環境の中で、コミュニケーションを通して必要な情報をいかに抽出するか、

それを用いていかに体系化した知識を学習していくかが課題です。

コンピュータが、人間と経験や知識を共有できるようになれば、

人間とコンピュータの新しい関係が生まれるでしょう。

I am researching computer systems that can learn language and world knowledge through

natural communication with humans.
Such a system must be able to process various kinds of information, including speech, in their environment, and acquire new knowledge by experience as classely as possible to the way.

Problems include how meaningful information is extracted through communication in a changing environment, and how systemized knowledge is learned using such information. If computers can share experience and knowledge with humans, a new relationship between humans and computers will emerge.

インタラクションラボラトリー Interaction Laboratory

インタラクションラボラトリーは、近未来における情報環境や生活環境の変革を探求するために、 1999年に設立されました。ソニーコンピュータサイエンス研究所で過去5年間に渡って展開して きた実世界指向ユーザインタフェースの研究をさらに発展させ、デジタルな存在であるコンピュー タや情報ネットワークと、フィジカルな存在である人間を有機的に結合するための、ソフトウェア・ハ ードウェア・センサーに関する基盤的研究、人間の能力・側造性を拡張するためのインタフェース 技術の研究開発を行っています。さらに、単に技術サイドからのアプローチのみに留まらず、デザ インやライフスタイルを含む、人間に対する深い理解に基づく統合的な視点で研究を進めています。 「人とテクノロジーの共生的関係を樹立する」ことがインタラクションラボラトリーの掲げる基本的

The Interaction Laboratory was established in 1999 to investigate the future of human computer The Interaction Laboratory was established in 1999 to investigate the future of human computer interactions and digital lifestyles. Expanding the previous real-world user interface research within the Sony Computer Science Laboratories, we are currently working on fundamental technologies, including software architectures, hardware architectures, and sensor architectures, that will be needed to realize natural and intuitive interactions between the human, as a physical entity, and the information environment, as a digital entity. In addition to technology-oriented activities, we are also seeking a deeper understanding of human life itself, through cognitive research, and design and lifestyle studies. The Interaction Laboratory's fundamental goal is to establish symbiotic relationships between humans and technology.

> 現在のコンピュータは、情報を操作するための道具として主に使われており、 私たちの現実世界での生活を快適にするようには設計されていません。 私の研究の興味は、非常に小型でかつ個人化されたコンピュータや、 逆に生活環境と一体化したコンピュータ群によって、特来の生活や社会が どのように再デザインされていくか、という点にあります。 このようなコンピュータは計算指向というよりは実世界指向であり、 状況認識などの技術によって、従来のように煩雑な指令を与えなくても 我々の実世界での作業を支援します。近い将来、このようなコンピュータ群は 今日の眼鏡や腕時計のようにあたりまえのものになり、 また生活環境の一部として不可欠な存在となるでしょう。

Today's computers serve mainly as tools for manipulating digital information, but are not designed for making our physical world more comfortable. I am interested in designing a new human computer interaction style based on highly personalized portable computers and environmentally embedded computers. These computers will be aware of our physical environment and thus more real world oriented rather computation oriented. Under such an environment, we will be able to concentrate on real world tasks that are constantly augmented by the computer's information. I expect that such computers will be as commonplace as today's eyeglasses and wistswards—and will be computer's information. I expect that such computers will be as commonplace as today's eyeglasses and wistswards—and will be computer's information. and wristwatches, and will be seamlessly integrated into our daily lives

Jun Rekimoto and Masanori Saitoh.

"Augmented Surfaces: A Snatially Continuous Workspace for Hybrid Computing Environments", Proceedings of ACM CHI'99, 1999.

Jun Rekimoto, "A multiple-device approach for supporting whiteboard-based interactions", Proceedings of ACM CHI'98, 1998.

Jun Rekimoto,
"NaviCam: A Magnifying Glass Approach to Augmented Reality Systems", Presence: Teleoperators and Virtual Environments, vol. 6, no. 4, MIT Press, 1997







長谷川 踏太 HASEGAWA, Tota

私のこの研究所における役割は、新しい技術、研究が出来たときに、 見かけのデザインだけでなくそのコンテンツや応用先、それに伴うインタラクションを 研究者と一緒に探究することです。またどのようなインタラクションの演出が、 どのような目的に効果的かという事を常に考えて作業しています。 今迄のインターフェースデザインは、便利さや効率ばかりに焦点があたりがちでしたが、 目的によってはエンターテイメント性やきもちよぎ、かっこよぎ、面白さなどに 重点がおかれたインターフェースデザインがあっても良いと考えています。 テクノロジーが進歩し、人とコンピュータの関係が多様になるにつれ、 このような探究がより重要になってくると考えています。

My aim is to design and explore the applications, content and interactions for any technologies invented in this lab. "What kinds of interaction are appropriate to what purposes?" is the question that must be kept in my mind. Over the past Iew years, the development of interaction design has been focused mostly on efficiency and convenience. However, I believe there are other directions in interaction design which are more about entertainment, pleasant feeling, coolness, a sense of humour, and so on, I consider these kind of elements are important areas to explore as the relationship between humans and computers become more diverse and complex.

大場 晴夫 ORA HOUSE

現実世界と仮想世界との視覚的な接点はディスプレーにある。 このディスプレーを、身近な道具とより近づけるこで、インターフェイスが変化し、 人間とコンピューターとの関わりが進化してゆくと考えている。 そこでは、さまざまな新しい道具が生まれ、より自然でフレンドリーな ソニーの製品デザイン(VAIO)を手がり、これらのコンセプトを商品として 具体化しながら、現実と仮想とをつなぐ新しい道具のあり方を研究している。





松下 伸行 MATSUSHITA Nobuguki

コンピュータは真の道具となりうるのでしょうか。 コンピュータは生活の至る所で使用され、もはや必需品となっています。 近い将来その数はさらに増大し、複数のコンピュータを連携させて 使用するようになるでしょう。複数の道具を組み合わせて使うことは、 人類が道具を手に入れた時から身につけてきた能力です。 その能力を生かすために、コンピュータは我々の従来の遺具に そこで重要となるのが、人間のもつ身体的、空間的な認識能力です。 将来のコンピュータは、このような能力を積極的にとりいれ、 もっと日常的な動作に近い感覚で操作できるようになるでしょう。

Is it possible for companies to be genuine tools." Computers have become pervasive, and necessities of life. In the future, their numbers will continue to increase. Multiple computers will be combined to provide new services. The ability to combine tools is uniquely human. It is a skill acquired shortly after their invention. To make better use of their capabilities, computers must be used like commonplace tools. To be used in this way, they must provide a sense of bodily and spatial recognition. Such a sense would allow more provided as sense of bodily and spatial recognition. Such a sense would allow

計算機上の世界は、現実の世界の物理的制約に ほとんど束縛されません。しかし、人間にとっては、 慣れ親しんださまざまな現実の事象に近いもののほうが、 理解や操作が(たいていの場合)容易になります。 現実の世界の特性とそこから自由なものとを、どう融合させると、 人間と計算機とのインタフェースとして、より心地好く 便利なものができるのかということに興味を持っています。 現在は、新しい融合の仕方の一つである、 実世界指向ユーザインタフェースを中心に研究をしています。 このようなユーザインタフェースの研究から、人間の認識や知覚の 特性の一端を見出だすことができるのではないかとも考えています。

The world within computers is largely free of real-world physical constraints. People, on the other hand, can more easily recognize and manipulate things and events that are similar to the real world. I am interested in merging these two worlds in order to create convenient and comfortable human-computer interfaces. Real-world user interfaces are one way of accomplishing this goal, and is currently my main research topic. Lexpect that investigating various methods of merging will reveal aspects of human perception and recognition.

Y. Ayatsuka, S. Matsuoka and J. Rekimoto, "Lavered Penumbrae: an Effective 3D Feedback Technique", Asia Pacific Computer Human Interaction 1998 (APCHI'98), pp.202-209, Jul. 1998.

Y. Ayatsuka, J. Rekimoto and S. Matsuoka, "Popup Vernier: a Tool for Sub-pixel-pitch Dragging with Smooth Mode Transition", ACM UIST '98, pp.39-48, Nov. 1998.

Y. Ayaruska, N. Matsushita and J. Rekimoto.

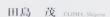
"HossePublite: a Hybrid Computing Environment for Small Computing Devices", ACM CHI 2000 Extended Abstracts, pp. 133-134, Apr. 2000.

"HossePublite: a Hybrid Computing Environment for Small Computing Devices", ACM CHI 2000 Extended Abstracts, pp. 133-134, Apr. 2000.

塚 祐









PDAやモバイルフォン、あるいは超小型使い捨てコンピュータ等、 コンピュータは その形体だけでなく、使い方もインターフェースも 非常に早く変化している。一方、人間のインターフェースは そう簡単に変えることはできず、新しいインターフェースがどうしても 必要となる。この様な観点から、人間の体をメディアとする コンピュータとのコミュニケーションシステムを現在研究している。 コンピュータと人間の共存のためにも、コンピュータが各人の アイデンティティーを認識する必要があり、人体ベースの コミュニケーションがこの解答のひとつとなるであろう。



唐沢 英了 KARASAWA, Hidenori

私たちの身の回りにはコンピュータがあふれ、 プロセッサの速度もものすごい勢いで速くなっています。 今まで、人とコンピュータとのインターフェイスは、 GUIを基本としたものが長い間使われてきました。 しかし、機械の発達などにより、未来の映画にでてくるようなインターフェイスが、 実際にユーザーの手元に届き始めています。そうなってきたとき、 具体的な操作感のイメージが必要となってくるでしょう。 私たちデザイナーは、私たちが考える数値では表しにくい部分をリサーチャーと 共有する事を目的に研究を行っています。 コンピュータに使い方を強要されるインターフェイスではなく、 使っていて気持ちのいいインターフェイスを提案していけると考えます。

Computers have become widely used, and processors are becoming faster. Graphical user interfaces are currently the main human-computer interface. Advanced technologies are making futuristic interfaces are currently to possible. A feeling of manipulation is important in such interfaces that the seen in movies I am interested in bringing the ideas of designers and researchers together. I aim to propose interfaces that center on user comfort, instead of making users secondary to computers.



機械はその美を選ぶものと考えました。 今日、人間の感覚は、機械を適した様々な体験に対して、最良の時を迎えつつあります。 製品やサービスの経済的価値は、人々に素晴らしい体験をさせるための、 不断の努力によって決まるようになるでしょう。

私は、人々の社会性を高めるような、素晴らしい体験をもたらす 新しいものを領り出すことの手助けができればよいと思っています。



Until recently technology alone has defined the relationship between people and new artifacts. The original designers of the Bauhaus looked for the 'new machine aeroberic' and to the machine itself as the vehicle for this. Totaly humans sensibilities are becoming the capasitone for any machine-mediated experience. The economic value of any product or services will hinge on the sustained effort very time towards.

戸塚 惠一 TOTSUKA, Keiichi

コンピュータサイエンスという言葉が、アイロニカルに響いてしまう時が すぐに来るだろう。コンピューターは社会の中に深く入り込んでしまい、 それを意識することなく生活することがあたりまえになり、 自分が何をしたいかをマシーンとコミュニケートするだけでよくなるからだ。 だからと言って、インタラクションはなくならない。 むしろ、言い訳ができないほどシンプルなプロセスを倒らなければならない。 その時こそ、デザイナーの出番である。人と人とが、見て、話して、触って コミュニケーションするのと同じように、感覚全てを生かした インタラクション・デザインを、特来のマシーンの為に開発している。 もちろん、ソニーらしい美しく、かっこいいものを。

The phrase "computer science" will soon be a thing of the past.

Computers will affect social lives so deeply that we will communicate with machines without awareness of their presence. We are developing a simple interaction with the aesthetic sense of this future. It entails development of a communication method that uses all the senses.





飛田博章 TOBITA, Hiroaki

計算機の発達にともない、3次元CGは身近なものとなりましたが、 多くのユーザにとって、3次元空間に対し意図した横画を行うことは難しいままです。 私の研究の興味は、誰でも簡単に楽しく自分のアイデアを表現することができる 3次元空間をデザインする点にあります。 リアリティーを追求するのではなく、空間的な広がりやインタラクションの面白さを

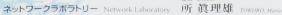
表現することを目指しています。このような空間では、3Dシーンの クリエーションだけでなく、それを通じたコミュニケーションも広がるはずです。 また、仮想世界と実世界は必ずしも無関係ではないので、

実世界の状況を仮想世界に反映させることも不可欠な要素となるでしょう。

As computers have evolved, 3D computer graphics has become popular in many fields. However, creating 3D scenes is still quite difficult.

I am interested in designing tools which allow users to freely express their own ideas when creating interactive

3D scenes. I focus on providing a sense of space and on pleasant interaction, rather than on reality in such environments, users can not only create 2D scene, but also use them to real communicate in a fall in addition, it is necessary for 3D scenes to reflect some above the rote (occumunicate virtual worlds are related to



"Internet for Billions with Full Digital Media"の実現に向けたネットワーク基盤技術の研 究開発を行う。21世紀の社会を支えるデジタルネットワーク基盤は、今後も継続する接続機器の 増加と通信量の増大、およびフルデジタル化された情報コンテンツを用いた次世代情報アプリケ ーションの展開に対応できなければならない。ネットラボでは、現在の情報ネットワーク基盤技術で は実現できない、新しい生活および産業活動を支えるコア技術およびライフスタイルの研究開発 を行う。国内外の研究組織および企業との協力関係を確立するとともに、積極的な実践的実証 実験への参画と貢献を通じて、Center of Network Research としての地位を確立することを

私は、広域なネットワーク環境において、高信頼性を実現する 通信アーキテクチャの研究に従事しています。 現在では、主に輻輳制御技術の研究を行っています。 ネットワーク資源を効率的に利用するためには、 冗長なトラフィックをできる限り減少させ、ネットワークの混雑を 積極的に解消していく必要があります。 私の研究の目標は、各通信エンティティが自律的な制御を 行うことにより、スケーラビリティの高い輻輳制御システムを 実現することです。このようなシステムを実現することにより、 ネットワーク中をデータが速やかに流通し、

利用者に快適な環境を提供できるようになります。



H 中



長健二朗 CHO. Keniliro

私の研究課題はスムースで一貫した単動をする。 直観的かつ柔軟なデータ通信メカニズムの実現です。 我々の考える遺信フレームワークは、個々の遺信メディアやサービスの特性に勤的に 適合して自己機能を最適化する、柔軟でインテリジェントなものです。 その複合体として構成されるインターネットワークの系全体は、短一刻と変化する トポロジやトラフィックに反応して、自律的にバランスを取るように働きます。 ネットワークは利用者に機能で、しかもしなやかな素物を提供する トラフィックシステムとなります。

constantly-changing topology and traffic. It is a traffic system which provides responsive yet flowing vehicles for the users.

塩野崎敦 SHIONOZAKI, Atsushi

今後インターネットには今まで以上にさまざまなデバイスが接続され、 新種のサービスが展開され、我々の日常生活はますます便利になるでしょう。 今まではネットワーク社会の構築を目指すため、インターネットの基盤技術を中心として、 実時間通信、資源予約、マルチキャストなどについて研究をしてきました。 このように技術と共にインターネットは進化してきましたが、今後のインターネット社会は、 ユーザやサービスの新たな要求を満たすために発展する必要があります。 そこで、従来とは異なり、モービリティ、情報配信、ホームネットワークを中心として、 次世代サービスが必要とするインフラ技術について研究しております。

We are approaching a futuristic age in which networked computers, invisible to the human eye because they are embedded in sensors and household appliances, will be accessible anywhere, anytime. Such a ubliquitous will be accessible anywhere, anytime. Such a ubliquitous will be a more anything and the protocols and technology and the protocols and technology with the protocols and technology will be a service control. More recently, I have shifted from a technology driven approach to a service or user-driven approach and the protocols and the protocols and the protocols are serviced to the protocols and the protocols and the protocols are serviced to the protocols are serviced to the protocols and the protocols are serviced to the protocols are serviced to the protocols are serviced to the protocols and the protocols are serviced to the protocols

Asseshi Shionozaki and Mario Tokoro,
"Control Handling in Real-Time Communication Protocols," In Proceedings of ACM SIGCOMM '93, September 199

Atsushi Shionozaki, Kei Yamashita, Shunsuke Utsumi, Kenjiro Cho. "Integrating Resource Reservation with Rate-Based Transport Protocols in AMInet," WWCA, March 1998.



寺岡 文男 TERAOKA, Fumio



現在のインターネットは多くの課題を抱えています。 たとえば品質を保証した通信をどのように実現するのか、 移動する計算機とどのように通信を行うのか、拡張し続けるネットワークに おいて経路制御やアドレス付けをどのように行うか、などです。 このような課題を解決する新しいネットワークアーキテクチャを 設計することが私の研究課題です。 新しいアーキテクチャは、必要に応じて資源予約を行ったり 動的に最適なプロトコルスタックを構築することにより、 ユーザの通信要求を実現します。

この新しいアーキテクチャに基づくネットワークは、既存のインターネットと 協調しつつ、次第に現在のインターネットに取って代わることになるでしょう。



竹内 奏吾 TAKEUCHI, Sohgo

現在のインターネットには、地理位置情報を扱うための機構が存在しない。 そのため、最寄りの郵便ポストを検索したり、人やタクシーの現在位置を検索したりといった。 位置を利用したシステムを構築することが容易ではない。 そこで、インターネットにおいて地理位置情報を扱うためのアーキテクチャ、 システムについて研究している。移動するものしないものにかかわらず、 どのようにすれば、世界中のさまざまな物体の位置情報を効率的に管理できるか、 位置を利用したシステムを容易に作成するにはどのようなインタフェースが必要か、 位置情報というプライベートな情報を安全に利用するには、 どのような機能が必要とされるかといった問題について取り組んでいる。

Currently, there is no mechanism on the Internet that uses geographical location information. It is not easy to build a system that uses such information to, for example, search for the nearest postbox and/or find the current geographical location of people or cars. My research focuses on designing an architecture and creating a system for managing geographical location information on the Internet. Using my system, information on fixed and mobile entities can be managed efficiently. I have also designed an easy-to-use, efficient API for handling geographical location information, and mechanisms to overcome security problems.

竹内 委告、中村 毫立、多田 好立。 「インターキットにおける無理位置情報管理システムの設計と実装」、情報処理学会 マルチメアイア、分数、協調とモーバイルシンボジウム論 文章、pp. 405-410, Jun 1990

江崎 浩 ESAKI, Hiroshi

次世代インターネットのコア技術となるポリシーネットワーク技術、 およびそれを支える基盤要素技術の研究開発を行う。 Diff Serv技術に代表されるサービス品質(QoS)/サービスクラス(CoS)を意識した パケット転送技術、および経路制御技術、様々なパケットの転送がリシの制御管理技術、 実践的なマルチキャストサービスの提供、モーバイルインターネット、 光スイッチング技術を用いた新しいインターネットアーキテクチャなど、 広域大規模インターネットアーキテクチャに関する研究を行う。

infrastructure. My area of interest are packet transmission in ching you do a post you do an age state in agriculture in the properties of the properties of



人間の脳の驚くべき能力は、コンピュータ技術を推進するうえで常に重要なインスピレーションの 源になっています。Sony CSL パリでは言語、知覚、音楽などを理解するための認知機構の研 党を行なっています。我々は、複雑な適応システムや非線形力学の理論に触発され、個々の人 闘やそのグループが世界に関する(1)共有オントロジー、(2)共通言語、(3)言語を現実世界に接地 するための知覚ストラテジー、さらに(4)複雑な環境に適応するために自己を向上させるための 挙動システム、などを獲得することを可能とする機構の発見につとめています。

The awesome capabilities of the human brain have always been an important source of inspiration for pushing computer technology ahead. At the Paris section of CSL we try to understand the cognitive mechanisms that play a role in language, perception, and music Inspired by the theory of complex adaptive systems and non-linear dynamics, we attempt to identify the mechanisms that enable individual humans and groups to develop a shared ontology of their word, a shared language for communicating about their word! perceptual strategies for grounding language in reality, and behavioral systems that can bootstrap themselves towards ever greater commerciate.



Director

STEELS, Luc

I am fascinated by how human beings communicate about their world and particularly how they

reason why this research is so rich and fruitful is because it spans an aspects to cognition volume perception and concept formation to planning and learning. So far, I have already been able to reach some very important milestones, together with other members of the laboratory. In particular, we have demonstrated solid mechanisms for the acquisition of lexicons and the concepts that underly them in populations of artificial gents. We have also made considerable progress showing how a repertoire of sounds which can be the basis of a language system can spontaneously form and be learned in a population work time to scale up these results in complexity, so I am working on more complex semantic. and syntactic processing and how that can evolve, but still taking an evolutionary perspective

Steels, L. (2000) The emergence of Grammar in Communicating Autonomous Robotic Agents. In: Horn, W. (ed.) Proceedings of ECAI 2000. IOS Publishing, Amsterdam.

Steels, L. (2000) Language as a complex adaptive system. Lecture Notes in Computer Science.

Parallel Problem Solving from Nature - PPSN-VI. Volume Editor(s): Schoenauer & al. Springer-Verlag, Berlin.

PACHET, François

since Latison's rivention of the Grandophone in 1878, technology has been used continuously to improve the sound quality of music, reaching today optimum performance. We believe technology can also be used to instead to the music listening experience in novel ways, provided we have better models of the whole music listening chain, from the music played to the listener. We address these issues systematically, music feature extraction, i.e. building meaningful representations of perceptively important dimensions of music (rhythm, style, energy), music search and retrieval in large catalogues through sequence generation, and modelling user tastes both individually and collectively. Applications of this research ranges from new Electronic Music Distribution schemes to interactive 3D music listening environments. Since Edison's invention of the Gramophone in 1878, technology has been used continuously to improve

Pachet, F. Roy, P. Caraly, D. "A Combinatorial approach to content-based music selection". IEEE Multimedia, March 2000.

Pachet, F. Delerue, O. "On-The-Fly Multi Track Mixing", Audio Engineering Society, 109th Convention, Los Angeles, September 2000

Pacher, F. Roy, P. "Automatic Harmonization", Constraints Journal, Klower, January, 2001.



WESTERMANN, Gert





McINTYRE, Angus

To explain how humans can construct - and understand - utterances that we have never heard before, and how we learn to do so in the earhest years of our life, current inquisits theory assumes that our abilities are based on the use of generative grammars coupled with an innate! language acquisition device to aid in learning. Observational data suggests that the reality may be more complicated; our everyday language use is much more likely to involve fragments than complete sentences, and the utterances we produce often seem to make use of stored 'chunks' of language that can be re-used and recombined as necessary. My research applies memory-based techniques to the study of language evolution and learning. The objective is to investigate how item-based approaches might form a basis for efficient language learning, and to see what insights into human language can be gained by using such systems.

KAPLAN, Frédéric



MIRANDA, Eduardo

Miranda, E. R., Mickelling the Evolution of Complex Sounds: A Cellular Automata Approach, Proceedings of the ASSEVH Symposium on Control Evolutionary Systems, pp. 100-104, 1989. (ISBN 1-902006 03-0)

Miranda, E. R., Computer Sound Symbols, Oxford (UK): Foral Press, 1988, (ISBN 0-240-51517-X)



ソニーコンピュータサイエンス研究所 総務マネージャーの北森裕見子です。 CSLの総務オフィススタフをご紹介します。 アシスタントマネージャーの川島由美子、軽準相当の黒川和恵、ATL室長 秘書の和田佳代子です。私たち4名かCSL研究員の総務全般のサポートを しています。縁の下の力で研究員が集中して研究できる環境を整え、大き な業界を出してもらえるように、日々努めております。 大き、報務的なご質問等は総務オフィスまでご連絡ください。

KITAMORI, Yumiko. Administrative Manager of CSL. I would like to introduce our office staff:

New York Staff Staff

CSL Paris

BASTIEN, Nicole, Administrative Manager
My job requires to handle administrative, general and financial
management to make the unit operational and provide support for the
scientific activities of the personnel. Also I act as the interface
to the outside world, As CSL Paris is an international laboratory,
therefore I am trained to understand and cope with researchers coming
from foreign countries to make things easier for them and to take
care of the harmony of the group.





「ソニーコンピュータサイエンス研究所」は、1988年2月にソニー株式会社とは別法人として設立されました。
内外のトップクラスの研究者に参加していただくために、通常の企業内研究所の概念を越えた環境と特遇を提供するために
わざわざ別法人にしたのです。おかけさまで、「オブジェクト指向OS」、「ネットワーク上のバーチャル・ソサエティ(VRML)」、
「移動ホストプロトコル」、「計算場モデル」、「エージェント指向OS」、「ネットワーク上のバーチャル・ソサエティ(VRML)」、
「移動ホストプロトコル」、「計算場モデル」、「エージェント指向OS」、「ネットワーク上のバーチャル・ソサエティ(VRML)」、
「各動ホストプロトコル」、「計算場モデル」、「エージェント指向OS」、「ネットワーク上のバーチャル・ソサエティ(VRML)」、
「各動ホストプロトコル」、「計算場モデル」、「エージェント指向OS」のと、数々の際立った研究成果が上かり、
学会や業界から高い評価をいただくことができました。
21世紀の社会は、何百億行の様々の形態のコンピュータが有線、無線のネットワークに接続され、
コンピュータとネットワークがあたから生き物のように学動して、4枚の生活を支えていると子想されます。
上記の研究成果はそのための重要な技術要素となると確信していますが、今後は更にそのようなネットワーク全般の
基本的アーキテチャ、またネットワーク中に巨大な数の進化するエージェントが生息している場合の諸問題などに取り組む予定です。
このあたりの話は、もはや工学だけで関じることは不可能で、生物や日然の生態系から多くを学ぶ必要があります。
複雑系の問題はその中心課題の一つです。1996年10月には複雑系をメインテーマとする研究所をフランスのバリにオーブンしました。
また、ネットワーク上の仮想を関係が発達すればするほど、それと実空間とをいかにシームレスに接続するかという問題に
取り組む必要が出てきます。これらを通じて、より人間的な、そして豊かな未来の創造に向けて努力していて所存です。
特様の一種のこま様をお願いします。

ソニーコンピュータサイエンス研究所 会長、CEO 土 井 利 史・ソニー株式会社 上席常務

Established in February 1988 as an independent corporation, Sony Computer Science Laboratories, Inc. invites topclass researchers and scientists from all over the world to join the effort to create new technologies under its founding spirit of bringing about fundamental changes in society. Thanks to their sincere commitment and hard work, we have already achieved many outstanding results, including: an object-oriented operating system for distributed processing, a mobile host protocol, a computational field model and agent-based human computer interactions. These systems and models have earned high standing in both academic and industrial communities. The strength of the stre

The more cyberspace evolves, the greater the need for the seamless integration of cyberspace and the real world. I believe our research accomplishments will not only receive high scholastic acclaim, but will eventually contribute to the quality of human life in the dawn of a new age.



DOI, Toshi T.

Chairman, CEO, Sony Computer Science Laboratories, Inc.

Corporate Executive Vice President, Sony Corporation



Dreaming up the future.

「ソニーコンピュータサイエンス研究所」は、1988年3月にソートの外のトップクラスの研究者に参加していただくために、通知のおわざわざ別法人にしたのです。おかけでまで、「オブジョント語の「移動ホストプロトコル」、「計算場モデル」、「ユージョント語の学会や業界から高い評価をいただくことができました。コンピュータとネットワークがあたかも生き物のよりに乗り出た。コンピュータとネットワークがあたかも生き物のより、事態となると思いました。
基本的アーキテチャ、またネットワーク中に巨大な数の最近に、このあたりの話は、もはやエダだけで関しることはトリーニーを観響系の問題はその中心課題の一つです。1998年19月1日には参加を支が出てきまりませません。
東京の観音を表現してきます。これらを通じて、25人所のなど、特殊の一般のご支援をお願いとます。

ジニースンピュータサイス (A開発所 音楽 I) ジニー株式会社 上海常知

Established in Pebruary 1988 as an independent experience of the searchery and scientists from all over the search is part of the principal about fundamental changes as search in the processing, a mobile host protocol, a company of the processing, a mobile host protocol, a company of the protocol of the systems and models have earned high motion of the protocol of

Dreaming up the future. In considering the future of the considering the second the second that the second th

